

『好色五人女』巻四 恋草からげし八百屋物語」の考察

大 掛 麻 央

一、お七と吉三郎の性格について

本稿では、この作品を解明する為に大きく三つの項目に分け、分析していくものとする。

まず初めに一つ目の項目として、お七と吉三郎の性格の設定について本文より分析を行う。

本文中の、曰くありげな振袖を見て「思へば夢なれや、何事もいらぬ世や、後生こそまことなれとしほしほとしづみ果」と思いしよんぼりと沈んでいるという部分からは、お七の少女らしい豊かな感受性が表現されている。またそれと同時に、強い意志のある女性であることが伺える。なぜなら、今自分が生きている人生について不満を持っているからこそ後生に望みをかけているのである。つまり元は、強い意志や願望があるからこそ、希望も自由もない今の世の中に落胆しているのである。元々自由に対しての強

い意志や願望がなければ、今の世の中や自分自身の生き方について、何の疑問も持たずに生きていくだろう。

丁度そんな時に、障子を開けて夕暮れの光の中から出てきたのは、銀色の毛抜きを片手に左の人差し指に刺さった刺を気にした吉三郎だった。それを寺田晶海氏は「夕暮れの光の中に佇む美少年の姿は、息を呑むような美しさがある。そこに、刺を抜こうと少年の手を取る美少女お七の姿が重なる」と、はっとするほど美しい場面がうまれるのである。」と述べている。そしてそこには吉三郎の、一人では小さな困難も容易に解決できない弱さと、母性本能をくすぐるような可愛らしさがあり、女性にとって放っておけない存在であることが読み取れる。また銀色という色は白金とも称されたように、純粹無垢の意味がある。そこから、西鶴が吉三郎をそういつた男性として描こうとしていた事が分かる。そして夕暮れの光の中から出てきた

というのも神々しいものがあり、銀色の毛抜きであったというのもお七にとつて特別であつたように、吉三郎も特別に輝いて見えたのである。この部分は本文の中でも、お七と吉三郎が初めて出会う場面であるがゆえに、二人にとつても特別な意味がこめられた別世界への入り口になつたのである。

吉三郎が、思わずお七の手を握つたことで二人の恋が始まるのだが、この吉三郎の行為は思はずした行為ではない、吉三郎が恋に積極的で能動的な少年であつたわけではないといえる。それは刺を自分で抜く事もできずにいた様子や、長老や雷を恐がり、なかなか自分からは契りを結ばない様子からも分かる。しかし、お七がわざと毛抜きを返し忘れたふりをして、吉三郎を追いかけて手を握り返しに行く行動は、「初めての恋に戸惑いつつも自己の心に忠実に行動する、少年少女の可憐さ、純粹さがよく描かれて^(注2)いる」のである。またお七は、思い立つと即行動するという能動的な面を持ち、本来は自分の気持ちを曲げたり押さえ込んだりもしない、大胆で主張の強い女性である事がわかる。そしてお七は吉三郎に会いたい^(注3)がために、本当は恐い雷を強がつて恐くないなどと言う。この部分も女の身でありながら、自らを強く見せたがつているように受け取れ

る。小坊主の扱いについても非常に上手く丸め込み、手玉にとつている。とつさの判断にしては冷静で最善の方法をとつているのである。また、お七が忍び込んで来たにも関わらず、吉三郎は蒲団に戻りもぐろうとしたがお七に引きのけられたという部分や、契りを結んだ場面でもお七が常に主導権を握つてい^(注4)ると言える。このお七の動作の大胆さを「恋に手慣れた遊女の如きもの^(注5)」や「世慣れた遊女の手管を思わせる行為であり、彼女は必ずしも幼いとは言えない^(注6)」とする見解もあるが、これは自分から男性の元に忍び込んでいくという大胆な行動同様「あどけない少女の一途さの表れ^(注7)」ではないだろうか。もしお七が恋に慣れた少女であるなら、雷の力など借りなくても、吉三郎に行動を起こさせることができただろう。しかし二人は一向に契りを結ぶ事が出来ずに、涙を流すほどである。つまり、お七の積極性は恋に慣れてい^(注8)る為ではなく、純粹に恋をして一途に吉三郎を思^(注9)う強い意思や心がそうさせたのである。また「初恋故幼い故の無謀ともい^(注10)うべき一途さのためなのである。この無謀な一途さは、後に放火という大胆な罪を犯す事と繋が^(注11)つてくる。」という無謀な一途さと幼さ、大胆さが放火に繋が^(注12)つたという考え方は少し目のつけどころが違うのである。吉三郎が村の子に扮してお七に会いに来

た際に、吉三郎はお七が気付くまで自らの素性を明かさず体がぼろぼろになってしまった。この部分を見ると、一目会いたい一心で一生懸命にお七に会いに来たにも関わらず、勇気がないため名乗り出る事もできずにいる吉三郎に、お七も読者もなんともけなげな少年だろうと情が湧いてしまうのである。お七は、吉三郎という時に父親が帰ってくるという危機的狀況においても、冷静さを失うことなく何くわぬ様子で話をしている。ここからも十六歳になる少女だとは思えないほど度胸がすわっているといえる。放火という手段をとった事について「吉三郎が恋しいという一念のみで、何らかの手段を講じて会い得たのであるように、そうした知恵を働かせるには二人共幼すぎたのである」^(注)や

「余りに幼く短絡的な思考である」との見解があるが、幼い^(注)がために手段が思い浮かばず放火したというのは前述したお七の性格を考えると納得がいかない。お七は当然幼いのだが、手段無くして放火を選んだわけではなく、冷静に考えた末に一つの手段として放火を選んだのだ。放火の罪をありのままに白状したという部分や、処刑される最期の時も少しも取り乱す事がなかったという部分からは、初めの頃の現世への諦めではなく、希望やしつかりとした意思を持った女性であり現世での後悔がなかったからこそ、

堂々とした最期を迎えたのだと考えられる。それにくらべて吉三郎はお七を思い詰めて病気になったり、お七が死んだのを知り自殺をはかったりと、心が弱く軟弱である。また完全に^(注)お七に依存していたといえるだろう。

以上の事を簡単にまとめてみると、お七は自分の強い意思を持つており、冷静で周りの状況をよく見て把握している頭のいい少女であるといえる。吉三郎は、体力的にも精神的にも弱く、一人では生きていけない弱々しい青年であるが、純粹無垢で放っておけない愛らしい青年だといえる。一見対称的な二人だが、これも西鶴の狙いであった。

このことから、お七は決して本能のおもむくままに行動していたわけではない。ましてや「お七の幼さによって運命は破綻する」^(注)わけではない。二人はただ純粹無垢で、初恋を一途に貫き通したことは確かだが、決して幼さ故の本能的な行動ではない。特にお七には強い意思と現世でも後生でも希望を持つていたといえるのだ。

二、風を用いた情景描写について

二つ目のテーマとして、本文内に幾度となく用いられている風の情景について分析する。本文に出てくる風を使つた表現は、九箇所ある。一作品の中にこれほど風の情景が

使われることは些か不思議である。また巻四以外の好色五人女の作品においては風を使った情景どころか、それに変わるものすら幾度となく使われているものはない。さらには、風の情景が使われた箇所は必ず話の中で重要な場面である。これは風が、何か出来事が起こる前触れとして使われ、西鶴の意図する何かがあった為であると考えるのが自然である。

まず風の情景が用いられている部分を見ていくと、一つ目は文章の一番初めに「ならひ風はげしく」とある。本文の一番初めの出だしに使われたことによりその重要性がわかる。二つ目は十二月二十八日の火事でお寺に避難していたお七に、「折節の夜嵐をしのぎかねしに」すると住持が黒羽二重の大振袖を貸してくれた。ここはお七と吉三郎が初めて出会う前に、お七が後生へと望みを託している大事な場面である。三つ目はお七が吉三郎の寢床に行く直前で、柳原のあたりから来た使いによってほとんどの寺の者は出払った後に「松の風淋しく、虫出しの神鳴響き渡り」、お七は吉三郎に逢いに行く決心をしたのだ。四つ目に、二人が契りを結んだすぐ後に「吹上の榎の木朝風はげしく」、その後すぐに母親に連れ戻されてしまう。五つ目に吉三郎が里の子に成りすましお七に会いに行く場面でも「嵐、

枕に通ひ」と使われている。六つ目にお七の放火の直前で、「風のはげしき夕暮に」お七が放火をしたと書かれている。七つ目にお七の処刑の直前で、お七は「世の哀れ春ふく風に名を残し、おくれ桜の今日散りし身は」と辞世を読んだ部分である。八つ目にお七の処刑後に、「鈴の森松風ばかり残りて」と書かれている。九つ目は吉三郎が出家することになった場面で「盛なる花に時の間の嵐のごとく」というように風の情景が描かれている。

では、なぜ風という情景を用いたのだろうか。その理由をいくつか挙げてみると、古来より風という言葉は眼に見えない何者かを象徴するためにも使われていたので、それと関係しているのではないか。また、空気全体の動きということで、全体的な雰囲気の方角のような意味で風が使われる例が多いので、そのような意味を含ませているのではないか。そして、江戸時代は火事が多く、ちよつとした火の粉でも簡単に大火事に発展するので、風が吹く日には特に火事に注意していた事から、一度ついた火を消すことは大変なことであったということと関係するのではないだろうか。また風は人の力ではどうにもならない自然現象であることが言いたかったのではないだろうか。本文での風は、桜や吉三郎の髪、お七の灰までも吹き飛ばしている。

風の使われ方として、はかなくも散っていくお七と吉三郎への直接的な使われ方もされているのだ。現状を風によって吹き飛ばし変えているというのも大きな特徴である。

このように西鶴は、これらの理由とこの作品をリンクさせているのである。目に見えない何かが出来事の前触れを知らせているように、風がこれから起こる苦しくも幸せな出来事を予感させているのだ。西鶴の描く風には、生き物のような印象を持たされる。それは、風が淋しかったり烈しかったり嵐のようだったり、様々に変わりながらこの話の出来事をとらえているからである。そもそも風は同じところにとどまってはいない。ましてや人の力でどうにかなるものでもない。それは風のみが流れ行く方向を決めることができる、自由な存在である。これはお七や吉三郎が常に求めていたものであるといえる。二人は宿命や社会によって恋愛の自由を奪われているので、誰にも縛られることなく風のように思うままに生きていきたい、と願っていたのだ。それらが、西鶴が風の情景を多用した理由にあたるのではないかと考えられる。

三、本文中の言葉の分析

三つ目の項目として、本文で用いられている言葉の分析

を行っていく。

まず吉三郎の左手の薬指に刺がささり抜こうとする場面である。この場面ではお七と吉三郎が初めて出会いを果たすのに加え、お互いの気持ちを確認しあう重要な箇所である。だからこそ、分量の多さや二人の細やかな描写からも分かるように、左手の薬指に刺がささったことには西鶴が考えたそれなりの意味があったと考えるのが自然である。

心中とは他人に対して義理立てをする意味で用いられていた心中立が、江戸時代には刺青や切指等の行為と同様に男女の相愛を意味するようになった。心中立には、誓詞、放爪、断髪、入れ墨、切り指、貫肉がある。誓詞は起請文ともいい、年季明けに夫婦になることを誓うもので熊野牛王符を料紙として用い、裏面に誓詞を書く。掌の印を押捺することもあったが、血判という血液により押捺し、あるいは血書といって血液で書くこともあった。男は左手の、女は右手の中指あるいは薬指の上の関節と爪の生え際との間を、古くは剃刀、小刀で、のちに針で刺し、血液を落とすのである。^(注10)

つまり、心中立である左手の薬指から血液を落とすという行為は、誓詞といい、奉公する約束の年限がなければ一

緒になると誓うものであり、男女の相愛を意味するのである。文中で、刺がささっているのを左手の薬指としていたことを考えてみると、西鶴が意図してお七と吉三郎の恋、つまり二人の相愛を意味して描いたのだと考えられる。このように、西鶴が心中立を作品に忍ばせるのは不思議なことではないといえる。それは『好色五人女』巻一の「恋は闇夜を昼の国」に「誓紙千束につもり、爪は手箱にあまり、切らせし黒神は大綱になはせける」や巻一の二「くけ帯よりあらはるる文」に「お物師は針にて血をしぼり、心の程を書き遣はしける」と誓詞という形で心中立が書かれていることや、放爪においても『好色一代男』巻四の二「形見の水櫛」で、断髪においても『好色一代男』巻六の三「心中箱」に登場していることから裏づけられる。

西鶴はこの心中立を匂わせる記述を入れることで、二人の相愛を前もって予告していたのである。次に、左手の薬指に刺さった刺であるが、なぜ刺さっているかも分からないような刺を登場させたのだらう。これは、刺がささっているかのように、吉三郎には自分ではどうにもできないような事柄、宿命があり、そこから抜け出せなくなっていくということの意味する。刺さっているのかもよくわから

ないような刺が、吉三郎にとつては自分ではどうしようもできない自分の宿命のように描かれている。しかしお七は、その刺でもある吉三郎の宿命をいとも簡単に抜いてしまうのだ。西鶴は吉三郎にもあつた宿命という名の苦しみや重庄を、まずはお七が跳ね除け二人の恋は始まつたということを描きたかつたのかもしれない。

そして次に、住持が貸してくれた着替えである「黒羽二重の大振袖に、桐銀杏のならべ紋、紅裏を山道の裾取り、わけらしき小袖の仕立」という部分の桐と銀杏のならべ紋というところに注目する。桐の紋とは皇室の替紋として定紋菊花紋について権威のある紋章であつた。中国では鳳凰は桐に棲み、竹実を喰うと伝えられ、中国文化の渡来と共に日本にも輸入され、後に皇室御紋章として用いられた。皇室御紋である桐紋だが、その後主君が臣下に与える褒美用の紋章の趣があり、武士の家紋として広く流布したと考えられる。しかしその紋は名のある大名や武将が使用していたと考えられる。次に銀杏の紋は、徳川家の替紋であるという説もあるが、桐に比べれば使用していた人たちに大きな立場の開きがあるといえる。そしてならべ紋とは二つ紋、比翼紋とも称して相思相愛の男女の紋を二つ並べるものである。『色道大鏡』に「ちかき頃より二つもんとて

ちいさき紋をならべて付ること女郎にもおとこにもあり。(中略)……二つのうちかはりたるはひとつは我定紋、今ひとつはわがおもふものの紋とみゆ」とあるように、遊里にはじまり一般婦女にも流行したことがわかる。『都風俗鑑』にも「定紋はぬひに一つはもとより二つ三つならび、大方当世もてけうずる野郎の紋をつくる也」とある。^(注1)このことから、この振袖の持ち主は、身分の違う相思相愛の男性がいた女性で、振袖に桐と銀杏の二つ紋を入れたと考えられる。そしてこれは西鶴が意図して入れた記述であり、お七と吉三郎にこれから起こる出来事を暗示していたのだ。お七がこの曰くありげな振袖を見て、やはり現世には望みはなく諦めていたにも関わらず、この振袖の持ち主のように若死にしようのである。お七と同じくらいの年頃の女の子が若死にしてみたい、傷ましく哀れに思い、見たこともない人のために無常心が起こってしまうのだ。このように、これから自分が同じ運命をたどってしまうとはまったく考えもしないように描いている。しかし西鶴はこの桐と銀杏のならば紋を入れる事で、初めから身分の違う者同士恋は現世では上手くないかないということを暗示していたのである。

この話には悲劇的な題材が用いられているが、西鶴が

描きたかったのは悲劇的な結末でもモデル小説でもない。つまり結末が悲劇的であるのは、封建社会の下での意志的な恋愛が否定されていた為であり、意図して悲劇的に書いた訳ではない。もし悲劇的に書くという意図があったならば、お七をもつと自己主張のない、世の中の流れや宿命に流されていくような女性として描き、封建社会に従うしかないという悲しみが作品の前面に押し出されたはずである。しかし西鶴の描いたお七は、強い意志をもつた情熱的で、最期の瞬間まで凜とした女性である。そして、自らが招いた死という結果を少しも不幸と感じておらず、恋愛に全てを賭けた自らの人生に全く後悔することなく、満足を覚えているほどである。

西鶴が悲劇的な話を書いたのではないのは、放火によってこの物語が始まり、終わっていくのに対して、十二月二十八日の火事もお七がした放火も分量的にはかなり少ないことからわかる。西鶴は、お七と吉三郎の恋の過程はどうであったか、その初々しい情趣とそれを取り巻く状況設定に力点を置いている。その中でも契りを結ぶ場面は特に細かく書かれており、肉体交渉を描きながらもこの部分は少しも厭らしくない。それは二人の初々しく純粹な恋が感じられるからである。西鶴は「純一に相愛する男女の

情熱の極点における抱擁を、美しいもの」と考えていたのである。「何とも此恋はじめもどかし」と書かれていることから分かるように、「近世において肉体的に結ばれねば恋が成就したことになるなかつた。例え少年少女の初恋えあつとも同様であり、肉体関係によつて精神的な純粹さ、美しさが失われることは決してないのである。」という見解には説得力があるのだ。

お七の最期の姿が人々の同情を誘つたとあるが、何故これ程までに毅然たる態度で処刑を受け入れたのであろうか。それは「本質的に罪の意識がなかつた」^(注14)からではない。なぜなら本文でお七は、幼くも愚かな少女としては描かれていないのである。前述した通り、お七の性格を考えると投げやりになつて放火をしたわけでもなく、一途な恋を貫くために必要な手段だつたからだといえる。ましてや放火をした後の事を全く考えずに、罪の意識もなかつたとは考へにくい。お七にとつては吉三郎と会えない、自由な恋愛のできないこの生活では生きているとはいえなかつたのではないだろうか。お七のような意思の強い女性が自分の感情を押し殺したままで生き続けていくことは難しかつたのかもしれない。

この物語は、お七の恋とその破局が「美しきもの、微笑

ましきもの」「いじらしきもの、可憐なもの」として描かれて^(注15)いる。この描き方から、西鶴が一般少女の恋を認めていた事がわかる。西鶴が異性を恋する心は法で縛りきれるものではないという考えを持つていたからこそ「一般女性のもつ愛欲思慕の念が厳しく否定されていたことに甘んじて服することなくかえつてこれを是認し、肯定した物語を書いた」^(注16)のである。西鶴は儒教思想、封建思想の社会に生きた江戸時代の人間であるから、感情を抑圧する体制に抵抗しようという意志は持ち得なかつたのであろう。しかし「自身の興味に引きずられて」^(注17)のみ書いたというのではないだろう。この物語には、お七の恋の様子がひたすら描かれているのである。お七という少女の純粹無垢でいて、きちんと自分の意見を持った強い女性が自分の一途な気持ちを抑える事なく貫き通すことで、自分自身を変えたという思いや後生への希望こそが、この物語の主題であると言えるのである。自由な恋愛は不義とされた江戸時代であるから、西鶴が描いたのは道徳的に見ると罪を犯した女性ばかりであつた。それではなぜこの時代に反道徳的な女性を描いたのだろうか。ここで植田一夫氏は次のように述べている。

好色に対する憧れは、人間としての生命の発露であり、善とか悪の問題ではない。しかし、個人的な人間本能の無限な発露は、社会秩序を破壊させる危険性がある。したがって、社会秩序を防御するために、人間社会は道徳、法律などの文化体系を確立している。社会秩序維持のために、すべての人間を一色で塗りつぶし、個人として存在することを微塵も許そうとしない封建体制のもとでは、たとえそれが好色の問題でなくとも、個人としての自覚を持って行動し、生きることが秩序の破壊者として社会から圧迫される。^{注18}

しかし西鶴は、封建道徳に反しても異性を恋い慕う感情は自然なものであり、上からの抑圧で抑えられるものではないと考えていたのである。つまり強い意志を持った女性が自由を望む事を抑えることはできないという考え方が、結局は反道徳的な女性を描く事へとつながっていったのだ。

この作品が世間に受け入れられたのは、「愚直な迄の幼さと引きかえに世人の同情を集め」^{注19}たからではなく、「当時の浮世草子読者層が恋愛感情を道徳を越えたものと考えていた」^{注20}からである。江戸時代の町人は、身分制度と

商業資本主義という相容れない考え方の中で生活していた。町人は経済的な力を獲得すると、当然のように人間的な自由も求めようとする。しかし人間性を否定する身分制度の下では、自由を獲得することは困難であった。そして恋愛感情は精一杯の自我の表出であり、自分の生きたいように自由に人生を選択することが難しい時代だったからこそ、強い意思を持って自由に生きようとしたお七は、皆の理想化された憧れの対象だったのである。しかし近世においてそれは破滅を意味する事であったが、それだけに自らの決めた道を一途につき進む女性の姿を、西鶴は肯定していたのではないだろうか。

最後に、西鶴が「さてもく、取集めたる恋や、あはれや。無常なり、夢なり、現なり」と本文をしめくくっているのに注目したい。この部分は、男色女色入り乱れての恋は、哀れではなく夢や幻のようなものであるという意味であるが、西鶴は何が言いたかったのだろうか。

「思ひくらぶれば、命はありながら、お七最期よりは、なほ哀れなり」とは、命はあるものの吉三郎のことを哀れだと言っている部分である。西鶴が生き残ってしまった者を哀れだとしているのは、吉三郎に自分自身の影を見ていたからだといえる。西鶴が、自らを「あさましくつ

れなき物」と捉える感性を持ち続けることで、死ねなかつた吉三郎の生き方を正当化できず、母親が言った決定的な一言を意味不明のまま終わらせているのはそのためである。西鶴は妻が若くして亡くなり、大きな悲しみの中で妻の後を追って死んでしまいたい衝動に駆られながら、そうすることの出来ない自分自身を「あさましくつれなき物」と感じていた。そうした人間にとつて、「それとては死ぬもの、人の命にぞ有りける」と言いながら生き残ってしまった自分がいかに醜く映り、反対に愛に生きた者たちの姿がいかに美しく輝いてみえていたであろう。『諸艶大鑑』において、西鶴が心中死を否定していたことはよく知られているが、恐らくそれは、社会の側に生き残ってしまった自分が、彼らの痛みを分かち合えない存在であることを引け目と感ずる意識が混同していたからである。^{注10}

このような西鶴の「哀れなもの」への考え方や捉え方から、「さてよく、取集めたる恋や、あはれや。無常なり、夢なり、現なり」と最後を締めくくった西鶴の考えを分析すると、この部分からは西鶴の曖昧な気持ちが見える。男色女色は哀れではないもので、いつかは覚めてしまう夢や幻のようなものであると考えつつも、決して本文内でお七と吉三郎の恋を否定していないのだ。また、お七の放

火・処刑の様子等は細かく記されておらず、作中人物の悩みや心の葛藤等の心理描写が欠如しているか、書かれていても簡略であり、結果だけが記されていることが多い。このことから西鶴は、悲劇を同情的に美化して描こうとし、しばしば詠嘆的な言葉を入れているにも関わらず、一方で教訓や自身の感情的な思いを嘆き、お七らを犯罪者として捉えようとする姿勢もあるといえる。このような矛盾は西鶴自身の心の葛藤と読み取るのが自然であろう。

西鶴は色欲とは「人間や人生の本来の相として一種の超越的な態度で観照している」ものの現実の世の中で自由な恋愛は否定されるものであるという、厭世観に似た恋愛観を表すのである。これは完全に二人の身分違いの恋を応援し、時代や社会に反感を持っているということが言いたかったわけでもなく、二人の恋を否定的で悲劇的な話を書くこととして書いたわけでもない。ということとは、西鶴にはまた別に本文やお七を通して何か言いたかったことがあるのではないだろうか。

基本的に西鶴が描きたかったものは、自らの決めた道徳時代の道徳には反していたとしても一途に貫き通す女性としての姿である。それは西鶴自身が、封建道徳に反していても異性を恋慕う感情は自然なものであり、上からの抑圧で

抑えられるものではないと考えていたからである。これは当然、この作品の内容自体が世間で求められていたものであったからだ。「近世前期においては民衆の好色の要求の中には、封建的ないましめから解き放たれようとする人間的な欲求があつた」^(注2)ともあるように、人間性を否定し身分制度の支配する社会では、自由を獲得することは困難であつた。だからこそお七は、恋愛感情は精一杯の自我の表出であり、強い意思を持って自由に生きようとしたのだ。また、皆の理想化された憧れの対象として求められて書かれたものである。

そして西鶴自身は、『好色五人女』を出版した貞享三年から約一年前には、竹本義太夫と宇治加賀掾の競演があり、日本に有史以来ともいふべき演劇時代が近松と義太夫の提携によって始まろうとしていたことに影響されていたのだ。この時代の演劇はまだ始まったばかりであつたが、昂揚期特有の雰囲気があり、浄瑠璃などは文體の不自然を犯しても、劇的展開を獲得しようとする熱烈な要求を持つていたのである。「俳諧的文體にきたえられた西鶴は、語り物に必要な流麗な調子や變化や間などに熟していなかつたが、演劇の成立を可能ならしめる時代の到来はひしひし感じたに違いない」^(注3)。また西鶴はもともと劇界の人

達と交渉をもつており、俳友の大和屋甚兵衛の上演に刺激されて椀久を小説に書いたのもその表れだつたと考えられる。そして『椀久一世』後半の悲劇的形象は、西鶴の演劇への接近をうかがわせるものとなつた。さらに西鶴がこの作品全体において、恋愛が本来は非日常的なものであることを、さらに際立たせようとして、演劇的趣向という方法をとつている。それは、この八百屋お七という作品は、ゆるぎない現実や日常的な世界があるがゆえに、非日常世界がより鮮やかに浮かびがるという構造であるからだ。

また、誰もが知っている有名人を取り上げた作品は多くあつたが、名もない民衆がその主人公となつてきたのはこの時代が初めてであつた。このように西鶴は、お七事件について、「好色」として鈍化させたものとして描いたので。それは「好色」時代が人間の運命を左右するものとして描き、民衆の話題となつたのであろう。西鶴自体は、純粹に一途に恋に生きた少女が、社会によって現世では幸せにはなれなかつたという時代への嘆き、そして民衆が求めているものを素直に描こうとした作家としての強い意識によつてこの作品を描いたのではないかと考えられる。

以上で述べた結論では、この作品は西鶴がただ単に時代の波に乗せられて、読者が求めているものを描いただけだ

ということになる。しかし、これほどまでにお七や吉三郎の性格の設定を細かく分りやすいものにし、二人の恋の過程に力点を置きながらもどこか「恋」だけにとどまらない西鶴の描き方を見ると、他に言いたかつた事や考えが作品内には隠されているのではないかと思われる。以下では、そのもう一つの結論を述べる。

そこでもまず、これまでに本稿で出てきた、お七の持っていた後生や現世での「希望」というものについて述べる。それは希望とは何かということが、西鶴の言いたかつた事や考えへと繋がっていくからである。

そもそもお七と吉三郎には「宿命」、つまり個人ではどうすることもできない圧倒的な力としてその人生を支配するもので、すべての人生を呪縛し拘束するものがあつた。そしてこうした呪縛や宿命に対して大抵の人間は無自覚であるといえる。人は自分が知らない自分を抱える事になるが、それに気づく事も意識することもなく、無自覚のうち人生を築き繰り返していく。そして無自覚さに支配されている事に気付けないために、それまでの生き方をそのまま続けようとしてまたそのループが深く強いものになつていくのだ。

しかし二人に関しては無自覚のままではなかつた。自

分たちの立場を冷静に見極め「宿命」を受け入れていた。それは作品内初めでのお七の現世での諦めを言った部分や、二人が契りを交わす場面からもわかる。そうすると人間は、「絶望感や虚無感を感じ、一体人生に生きるに値する価値などあると言えるのだろうか、自らを苦しめ、周囲の人々をも悲しみに巻き込む宿命の深い闇をなぜ人は背負わねばならないのか、という疑問を改めて確かめてしまふ」のである。

このようなことに苦しんでいたお七だったが、それは吉三郎の登場によつてすぐに解消された。「肉体的にも精神的にも深い痛みを抱いたとき、必ずと言っていいほど、困難を解決し、癒しと救いをもたらす「人間の光」が現れる」という法則(注2)がある」とあるように、吉三郎という「人間の光」が現れたからである。それは、お七が宿命として背負つた闇の中から、吉三郎という一筋の光が開かれていったのである。というのも、「吉三郎が夕暮れの光の中から出てくる」という吉三郎とお七が初めて出会う場面で、宿命という闇に呑み込まれていたお七に差し込んできた一筋の光のように、吉三郎が描れていることから裏づけられる。人間が宿命の闇の中から光を生み出す歩みの中には、共通する一つの法則がある。それはまず、お互いが

宿命の中に身を置いてあるということであるその宿命ゆえに困窮し、苦悩し、虚無感に脅かされるが、自らの内なる闇を正面から引き受け、その闇の重さゆえに、それだけ切実に光への道を求めているということである。そして闇と向かい合い、闘い、変化させていくことによって、宿命の闇を背負ったその人間でなくては生み出すことのできない光を放つことになるのだ。宿命を背負い、闇を抱いたからこそ発する事の出来るかけがえのない光は、ただ二人を宿命の呪縛から自由にするだけでなく、周囲や時代、社会が抱く痛みや問題までも解決に導いていくのだ。つまり宿命の闇の中に、切り開かれる一筋の光とは、お七と吉三郎にとつての希望であつたのだ。

お七と吉三郎は自らの置かれた宿命を受け入れていた。そして宿命によつて自由のない人生であることを理解し自覚していたといえる。そんな中で闇の中に光が差し込むかのように、吉三郎とお七は出会い、宿命という名の呪縛から希望という光を導きだしたのだ。そして今ある自分たちの宿命を変えようとしていたのである。つまり希望を持つことは、持ち主が将来へ明るい望みを持つという事だけではなく、現状を変化させる為の一つの手段として用いられているのである。その一つの手段によつて、持ち主の周

囲の人や時代、社会をも変化させる可能性を秘めているのだ。

以下ではこれまで述べてきた三つの項目の結論を踏まえ、西鶴の描きたつたことをまとめていく。

この話には基となる実話があつたが、西鶴は基になる実話を大きな枠組みとしてとらえ、内容の細かな出来事や登場人物の描写や性格の設定などは、ほとんどは西鶴独自で考え出したものである。以前述べたように、この話に非日常が多く含まれているのは、西鶴自身が、日常と非日常の間には人の人格自体が変化していく可能性が隠されているのではないかと考えていたからである。日常と非日常を短い期間で何度も経験することで、よりいっそう非日常時の心の不安定さや揺らぎは「自分とは何か」という問いをもたらす。そして、それまでの自分のあり方を根底から変えるような心の動きをもたらすのだ。つまり、今までの自由のない宿命に縛られた人生をやめ、親や世間、社会から反対されようが、自分の気持を貫き通す強さを大切な事として描いていたのである。それは西鶴自身が自分の意見に素直で一途であるという時代に反することを肯定し、その先にあるものこそ人生を本当の意味で生きていると言えると思つていたからではないだろうか。また身分違いとい

う宿命を背負つて生まれてきたことに対して、それを受け入れ、解き放つことこそ真に人生を全うしていると考えていたのだろう。

お七と吉三郎の性格の設定においても、吉三郎の弱弱しく依存的で恋を受身に招きよせてしまうところは、相反するお七の強く一途な性格を際立たせるためであろう。周りや社会からの反対にもめげないお七の性格の設定は、この話を書くのに必須であつたと考えられる。自由な恋愛や思想が禁止されていたからこそ、自分の気持ちに正直で強い意思を持つたお七を描く必要があつたのだ。二人の初々しい情趣に力点を置いて書いているにも関わらず、桐と銀杏の紋を入れ、二人の恋は現世では上手くいかない暗示し、この恋は夢幻のようなものだと云つてゐる。このように西鶴は、身分違いの恋が叶うものだとしているわけではないのだ。しかし、お七自体の純粹無垢で自分の意見を強く持つた一途な生き方と、自分自身の今を変えたいという気持ちや現世で持っている希望に対しては、肯定しているのである。関根英二氏も次のように述べてゐる。

究極的な与える喜び、「命にかへた」相手におのれを贈る欲求に支えられており、限りある人の命を祝福す

る静かな希望を秘めたものでもあろう。だからこそ、『五人女』の西鶴は、恋に殉じていった者達の最期を悲劇でないものとして描き、いたましさの底に淡々とした喜びを湛えた何ものかとして肯定し続けていると見えるのである。^(注20)

こうした強い希望を持つた女性であつたからこそ、処刑される直前まで悔いることなく人生を生き抜くことができるのだ。このように悔いなく自分で決めた人生を歩みたいという思いは、西鶴を含め多くの人にあり、一種の理想像でもあつたと考えられる。

西鶴は、後生にばかり願うのではなく、たとえどんな結末になつたとしても、希望を持ち続けてほしいと思つてゐたのだ。そして今の自分自身を認め、考え、苦しむことで光を見出し、気持ちや精神的な面での自由を勝ち取つてほしいという強い思いがあつたのである。火事、風などの天災のように、人の力ではどうにもならない宿命であっても、自分で求め、自分で変えようと前を向いて希望を目指し続けなければいけないという西鶴の思いが伝わってくるのである。

注

- (注1) 寺田晶海『好色五人女・卷二卷四考』、立教大学日本文学、
立教大学日本文学会、第八十九号、64頁
- (注2) 前掲『好色五人女・卷二卷四考』、64頁
- (注3) 重友毅『西鶴の研究』文理書院、219頁
- (注4) 植田一夫『西鶴文芸の研究』笠間書院、75頁
- (注5) 矢野公和『西鶴論』、若草書房、160頁
- (注6) 先掲『好色五人女・卷二卷四考』64頁
- (注7) 前掲『好色五人女・卷二卷四考』、65頁
- (注8) 先掲『西鶴論』158頁
- (注9) 森田雅也『好色五人女における恋愛の形象性』34頁
- (注10) 前田金五郎『好色五人女全注釈』勉誠社、17頁
- (注11) 井原西鶴『井原西鶴集』、国民図書、380頁
- (注12) 暉峻康隆『西鶴評論と研究 上』、中央公論社、283頁
- (注13) 先掲『好色五人女・卷二卷四考』64頁
- (注14) 暉峻康隆『西鶴評論と研究 上』、中央公論社、284頁
- (注15) 先掲『西鶴の研究』、233頁
- (注16) 前掲『西鶴の研究』、234頁
- (注17) 前掲『西鶴の研究』、234頁
- (注18) 先掲『西鶴文芸の研究』、78頁
- (注19) 先掲『西鶴論』、158頁
- (注20) 先掲『好色五人女・卷二卷四考』、66頁
- (注21) 先掲『西鶴論』、174頁
- (注22) 森山重雄『近世における政治と文学——「好色五人女」

- 成立の基礎——』、文学、二十一卷十一号、岩波書店、1118頁
- (注23) 前掲『近世における政治と文学——「好色五人女」成立の基礎——』、1119頁
- (注24) 高橋佳子『希望の原理』、三玉出版株式会社、183頁
- (注25) 前掲『希望の原理』、189頁
- (注26) 関根英二『おさんの恋、お七の恋——(れんぼ)だけの身になる希望』、国文学解釈と鑑賞、至文堂、277頁